

十勝管内の2019年産農畜産物の総重量は、前年比 8 % 増の約456万トンとなった。記録が残る13年以降では、17年産の約460万トンに次ぐ 2 番目の水準。畑作が悪天候の影響を受けた18年産から一転、各作物の生育が順調に進み、規模拡大など好調要因が多い畜産も数字を伸ばした。

◆小麦32%増で、最も伸び幅大きく

ホクレン帯広支所が推計した。総重量は収量を表し、ビートや生乳など重さのある品目、また作付面積が大きい品目が好調だと増加しやすい。

耕種全体では10.1%増の約323万5000トン。18年産は夏場の長雨、低温、日照不足の影響で軒並み収量を落としたが、19年産は夏場以降の天候に恵まれ、収量を確保した品目が多かった。

小麦は32%増の約25万8000トンで伸び幅が最も大きかった。少雪や春先の高温の影響が心配されたが、6～7月に平年並みの天候となって実の成熟が進んだ。ビートも根の肥大が順調に進み、3%増の約173万7000トンとなった。

豆類は16%増の約7万5000トン。18年産は不作だった小豆が、作付面積の増加で32%ほど収量が伸びた。小豆の作付け増により、その分面積が減った大豆は12%減となった。

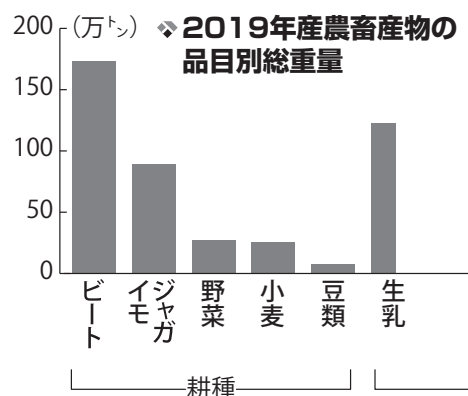
野菜は6%増の約27万トン。従来品種より直径が太い「とかち太郎」の作付けが始まったナガイモは12%増。タマネギ（30%増）、ニンジン（8%増）など全体的におおむね順調な収量となった。生育期の天候が良く、大玉傾向だったジャガイモも12%増の約89万4000トン。

畜産部門は3%増の約132万4000トン。うち生乳が約122万9000トンとなっている。生乳は酪農家の規模拡大に加え牧草の質も良く、3%増となった。牛肉、豚肉、家畜生体の合計は約9万5000トンと前年同水準で、安定した需要がある牛肉は5%増と数字を伸ばした。

J A 取扱高でみると19年産（3549億円）は17年産（3388億円）を大きく上回り過去最高を更新。17年産はビートが183万9500トンなど、耕種部門の好調さから総重量は最大の年となっている。



天候不順で不作だった18年から一転、豊作となった小麦。畑作は全体的に天候に恵まれて好調で重量が伸びた



◆ 2019年産管内農畜産物の総重量とJA取扱高

